



『安藝・加賀・周防・駿河・美濃・尾張』(秋の蚊が吸はふとするが身の終) 流石に言の葉の榮ゆく國だけに今も昔も仲々にユーモアに富んだ言葉のアヤが賑ひを秘めている。今此處に生物の名で面白さうなものを若干拾ひ集めて見よう。

「松」の字を分解して一八公と呼び、「鯉」は一列の鱗が卅六枚(實は不定)とて九々の呼聲で「六六魚」といふ。之等は百の字から一を取去って「白壽」と稱へ九十九歳を示し、「貞」の字をくずして「ロハ」、質屋を「一六(会せて七)銀行」をいふ類で仲々珍妙なもので泥的の隠語にでも出てきそうなところ。「葱」は本名を「キ」といひ、唯一字からとて「ヒトモジ」といふ。根を食うから「ネギ」、苗を「キナヘ」、色に浅葱(空色一青葱の色)・一後には浅黄・萌黄と書く。古の浅黄はうす黄色があり、葱に似た「アサツキ」は浅之葱である。

葉も美しいとて「葉まで見る櫻」をもちって「濱で(葉まで)見るもの一即ち鹽たく籠」とて「シオガマザクラ」。又、葉(齒)が無くて花が咲くとて「ウバザクラ」(姥櫻)等に至っては謎遊びのようである。

普通の蚊に「クレツクス(Culex)」といふ學名のものがあり、蚊取線香に蚊が倒に落ちるとて學名を逆讀の「クセルツク(Xeluc)」蠅を取るから「ハエトール」、痔が癒るからデノール、その他ナホリン、ケロリン等近頃の藥品名には随分とこったものが續出している。

米國のジョルダン博士が九州の方言を用ゐて「スナイデリヤ ヤマノカミ(Snyderia Yamanokami)」といふ學名を附けた魚がある。スナイデリヤは同じく魚學者のSnyder氏を記念したもので、名附親のジョルダン博士はヤマノカミを山の神様(Mountain God)の意味に思つて、この醜い貌の魚に相應しい名を考えたいが、何ぞ知らん、日本ではヤマノカミは妻の別名でもあり、娼天下で有名なスナイダー夫人を此の醜魚であてこすった様になつてしまつた。抑々妻をヤマノカミといふのはイロハ歌でオク(奥様のオク)がヤマの上(カミ)にあるからだといふ。こんな類に「ヘチマ」がある。色々の語源もあげてある中に、「ヘチマ、

一名トウリ(之は糸瓜の略或は唐瓜の約)と云ひ、トの字はイロハ歌のへとチの間(マ)にあるからヘチマと云う也」とはこじつけらしいが面白い。之にならつて烏野豌豆と雀野豌豆との中間形の野草に「カスマグサ」があり、近い例では牧野博士の、「カコマハグマ」等もそうである。

鈴蟲はふる鈴の音の如く(チンチロリン)、松蟲は松風の如し(リーン リーン)といわれてゐたが、いつしか名前が逆になつて、今では鈴蟲リンリン、松蟲チンチロリン(尤も今でも昔ながらの呼び方をしてゐる處もある)。キリキリキリとなくなき聲からキリギリス(今のコウロギ)、機織る音の様とてハタオリ(今のキリギリス)と云つたが、鳴く蟲の名は時代によつて變つてきた。植物でも「ムクゲ」をアサガホ、ハチス等よび(秋の七草アサガホは今の桔梗のこと)、菊はカハラヨモキ、オキナグサ。昔の「ニガナ」は今のリンドウ。軒にさす「アヤメ」は今のショウブ、野に咲く花ショウブは「ハナガツミ」(カツミはマコモのこと)で今でも越後邊ではマコモをカツボといふ)といわれ、又、枕草子等の「雁來紅」は今のカマツカであるなど、同じ名であっても昔と今では品がかわつてゐるものが澤山にあり、漢字の普通に使つてゐるものでも、例えば杜若がカキツバタでなく又燕子花も中國の飛燕草の類であるといふ様に、蓮、紫陽花、溪孫*、馬鈴薯、澤瀉、交談木、楓、梓、榎、柃、敗醬及び萩、椿など、中國では日本で當てゐる植物とは違つてゐるので、日本や中國の古い歌や詩文を讀む時等そのつもりでかからなくてはならない。

(スイッチョ)といふ聲は百姓が舌鼓をうちうち馬をスイッチョ スイッチョと追ふ様だとて馬追蟲といふ。(馬は止々で歩い動々で止るとは之如何一は笑話)。「クツムシ」はガチャガチャその鳴き聲を馬の轡の音になぞらへ聲そのままの表現の「ツクツクボウシ」を(筑紫戀し)と啼くのだと詠んだあたり誠に風流な見立の中、捕へれば草にかみついて首がぬけても離れぬとて「クビキリバツタ」とは少々殺伐である。

今は觀賞用の朝顔も昔は花も貧弱でみな種子を藥用(主に下劑)にする為栽培した。此の稀にして貴い種子を手に入れんとて高價な牛を牽いて行つて種子とかへたので朝顔を牽牛子(花)といふのである。元來我が國には「ン」の字が無かつた為、之を「ケニゴシ」と書き歌にさう詠んできた。又、中國では絹を用ゐて西域の良馬と交易をしたことがあつたので、今でも絹をはかるに一匹二匹といつてその名残を留めてゐる。

「九官鳥」が中國からはじめて渡來した時にその唐船に

九官といふ人がゐて「九官々々」とくちまねさせ、此の鳥は柵口で自分(即ち九官)の名を呼ぶと云つてゐたのを通譯が自分とは鳥自身の事と思ひ違へて「九官といふ鳥だ」と誤り傳えた為九官鳥といふ名になつてしまつた。

「五位鸞」は醍醐天皇の勅命に服して五位の位を貰つたと云ふ傳へであるが、之は平家物語であり謡曲に謡われてゐる事であるから先生におききしたがよい。

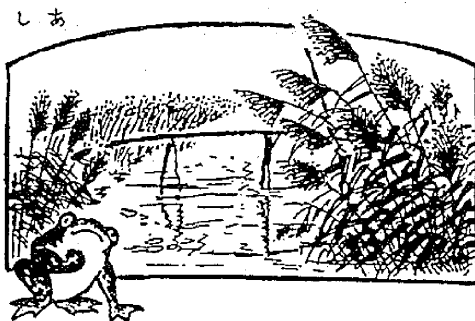


昔中國で非常に物忘れであつた茗荷といふ人の墓に妙な草が生出したので之を「メウガ」と呼んだ。或る宿屋で客が持物を忘れて行くようにと、茗荷づくしの料理を食べさせたら翌朝客は一切の物を忘れて飛出し、主人が喜んでゐると、客は途々忘れ物を思い出しては次々とみんな持歸つたが、遂に宿賃だけは思ひ起こさぬとみえて拂ひに歸らなかつた。メウガを食ふと物忘れをすると云ふがそんなことはない。

「カヘデ」は蛙手の訛で葉形が蛙の手に似てゐるからである。斯様な可愛い、形の、秋まっかに染るカヘデは中國には見られぬから、楓槭樹等の漢字をあて、はるもの、それはみな別物なのである。中國では紅葉といへば大抵此の楓(フウ)のことで之は我が内地では栽培の他野生はなく、清流に垂下る日本のかよわいかへでの美しさ等とは全く趣を異にしてゐる。杜牧の詩にある「停車坐愛楓林晚」をはじめ中國で紅葉をうたつたものを我が内地のカヘデ林の雅趣を以て賞翫しては眞の妙趣も窺はれまい。

「ラン」といへば葉の細い春蘭等と極つてゐるが本来中國で蘭といふのは、乾かすと大變に香のよい菊科のフジバカマの類である。滿洲の皇室の御紋章に用ゐられてゐるのは之であるから花瓣も五枚で、特異の六花瓣をもつ春蘭の花にあはない。後には蘭草、蘭花と両者にわけたが春蘭等所謂吾等の蘭は蘭花の方に入る。蘭花でも花と香本位の中國蘭花に較べて、清楚な姿を主に花は副の日本の蘭は香氣の少ないものが多いのに、卓上の一鉢の蘭花が室一ぱいに薫るかの如く詠んだもの等蘭は薫るものとの中國流の先入觀念からくる型式である。

「アシ」は悪しに通ふとてヨシとも云ふが、「アシ」「ヲギ」「ススキ」は皆別物で、ススキは乾いた山地に大きな叢をなし、アシは汀に亂雑な葉を茂らせて穂色も澁く、ヲギは沼や小川の岸にまばらに並んでふさふさとまつ白な穂を



擴げてそれぞれに特異な風韻をもつてゐる。同じアシでも「葭」「蘆」「葦」と字を使ひわけて幼生、老生をわかつ程微細に自然の雅趣を汲みとつた古人になつて近頃の人達もこれら微妙な景觀の描寫にはアシ、ヲギ、ススキのもつ風韻をよみとるだけの自然觀賞眼をもつてほしいものである。左様に自然の息吹の觀照に忠實であれば竹に木をついだやうな感じの歌や大自然の姿に反した不自然な繪なども描く人もなくなることであろう。

正月に飾る「ホンダワラ」は浮粟を米俵にみたてて穂俵といふのであるが、昔三韓征伐に海上で馬糧にあてたとて神馬草とも云ふ。ジンバサ、ギンバサ、ギバサの方言はこ、から出ている。

東北地方は發音が異つてゐて、白皮をスラカンバ、濱梨をハマナスといふことから「シラカンバ」「ハマナス」といふ名が出たといふ人もある。「ハス」はハチスの略で窩だらけのうてなを蜂の巣にみたてたのは面白い。七遍窟に入れても炭にならぬとて「ナナカマド」といひ、千遍振出しでもなほにがくて藥効があるとて「センフリ」といふ。

或る蛇に咬まれるとその日ばかりの命とて「ヒバカリ」と呼び、臺灣には咬まれると百歩歩かぬうちに死ぬとて百歩蛇といふのがゐる。然し本物のヒバカリには毒はない。

音便通音約音訛等からきてゐるものは數限りがない。カウゾ(紙麻)ゼンマイ(錢巻・錢舞)カシハ(炊葉)ナスビ(中澁(酸)實)ドングリ(橡栗)ヒノキ(火之木)オホバコ(大葉子)マンサク(先咲)カウタケ(皮茸)ドクダミ(毒痛)イタドリ(疼取)ナンジャモンジャ(本物は樟、何でふ物ぢゃ)クジラ(口廣)ムカデ(對手)ヤスデ(八十手)・セミ(脊見)ウナギ(胸黄)アヲダイショウ(青大蛇)ホタル(火垂、火照)サソリ(螫針)(中略)等々。

「スズラン」(君影草)の外國名直譯「谷間の姫百合」の美名に百合の花を想像した歌人もあつた。又、朝鮮ゴマ、花ワサビの方言に禍されて毒草をゴマ、ワサビの代用に供してあつたら命を落とした者もあるから出鱈目にうかうか名前もつけられない。動植物の名には異名や方言も非常に多い。